

檜川村・平沢地区の特質

―伝統的建造物群保存対策調査から―

はじめに 平成15・16年度の2ヵ年で、檜川村の平沢地区において伝統的建造物群保存対策調査をおこなった。本稿では、調査により判明した平沢における伝統的建造物群の特質について述べる。なお、詳しくは既刊の報告書『木曾平沢 ―伝統的建造物群保存対策調査報告―』（檜川村町並み文化整備課、2005年）を参照されたい。

平沢地区の概要 檜川村は長野県の西南部に位置する山間の村であり、南北に中山道と奈良井川が縦断している。長野県の木曾地方には近世に11の宿場が営まれ、檜川村に属する奈良井宿は、昭和53年（1983）、重要伝統的建造物群保存地区に選定され、修景によって近世における宿場町の情景はなお一層のものとなっている。

平沢は、檜川村のほぼ中央に位置する中山道沿いに開けた集落であり、近世から漆器生産の町としての歴史を歩んできた。町には現在でも漆器産業を支える多様な職人などが集住し、敷地中ほどにある土蔵を作業場として、今なお漆器が生産されている。その漆器産業の隆盛によって、近代以降、現在に至るまで平沢の町は発展し続けてきた。漆器店が軒を連ねる平沢には、伝統を継承しつつ変化に富んだ表情豊かな町並みが築かれている。

町の変遷 平沢は、16世紀末期に中山道が奈良井川の西から東に付け替えられた後、新たに成立した町である。成立当時の家数は18棟。享保9年（1724）の町並みの長さは約220m、家数は約80軒、寛延2年（1749）では131棟を数える。この年の大火で119棟が焼失し、町は壊滅的な打撃を受けた。その復興に際して町並みの空間構成が一変する。まず、中央に火除地として中山道から西に抜ける路地を新設、中山道の道幅も防火対策として東西に3尺ずつ拡幅された。享和元年（1801）における町並みの長さは約585m、136軒が街路に面して建てられていた。同区域における現在の家数は約130軒であるから、当時とほぼ一致している。その後、天保の飢饉によって人口は減少、天保10年（1839）の絵図「屋鋪田畑画図面」によると、宅地の数は102筆まで減少しているのがわかる。

大正13年（1924）、町の成立以降それまで継承してきた町割に変化がおこる。中山道の西側、中山道と並行するように新たな街路が設けられ、その街区は金西町と名付



図28 平沢の町並み（前面道路と家屋の間に空地を確保している）

けられた。金西町の設置は、町の構造を変化させはしたものの、街路が中山道東側の敷地の奥を南北に貫くように設けられたため、あらたに地割がなされた訳ではない。逆に、平沢の町並み空間に厚みを持たせる効果があったと思われる。

ところで、現在も数多く残る漆器生産の作業場である土蔵の連なりは、近世の絵図や近代の地籍図との比較検討によれば、近世後期の敷地奥行線を示していると考えられる。したがって、土蔵の位置と現在の敷地奥行を見比べることで、近代以降における敷地奥行の拡張量を知ることにもできる。土蔵の存在は漆器産業の発展の様子を視覚的に確認する上でも重要である。

町の構成 平沢の町は近世の地割を現在まで継承している。また、街路に面して空地を設けて主屋を建て（図28）、主屋の奥に漆器生産の作業場である土蔵を建てるという敷地の利用形態は変わることなく今日まで維持されてきた。その町並みは、近世において一般的であったらう出梁造の建物による均質な町並みに、近代以降、伝統的建造物の特性を維持しながら少しずつ形の違う建物が挿入されることで、表情豊かな町並みを形成している。伝統を継承しながらもそれに固執することなく、時代に応じた建物を建立したことで、時代性を如実に示す建物が数多くみられる。いわば、近世から現代にかけて各時代の建物を通観することができる町といえる。

さらに重要な点は土蔵の存在である。漆器生産の場として利用されてきたこの土蔵は、漆器産業で生計を立ててきた平沢のまさに核となるものである。また、各屋敷は、建物の中に正面から奥へと続くドジ（通り土間）と呼ばれる空間を持つものと、隣家との間に余地（隙間）を設け、そこを敷地奥への通路とする2つのタイプがある。両者とも、作業場である土蔵への動線を確保するためのものであり、土蔵と切り離して考えることのできない、平沢における敷地構成上の特徴で、この形態は近世から今日まで継承されている。

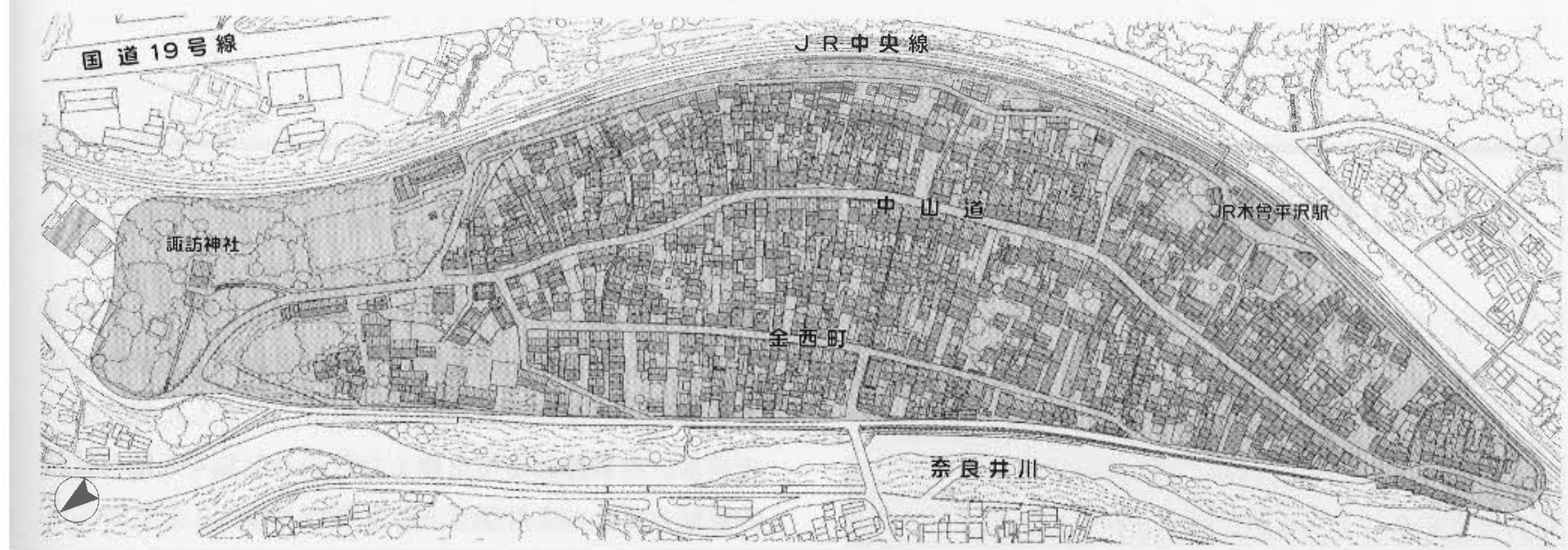


図29 伝統的建造物群保存地区範囲案 1:5000

町並みの特徴 以上の建築的特徴は、これまでも指摘してきたとおり、漆器産業との関連によって理解することができる。平沢の住民は近世から漆器生産で生計を立ててきた。漆器産業は現在でも町を支える根幹となっている。つまり、平沢は漆器産業という土台の上に構築された町であるとともに、現在も多くの漆器職人がこの町に集住し、土蔵をはじめとする作業場で今なお漆器生産を続けている。このようなことから、平沢は現在進行形の漆器産業の町であり、漆器職人の町と定義することができよう。かつて、産業によって発展した町は全国各地に数多く存在した。しかし、近年の社会構造の変容は、職人が集住した産業町の構造にも具体的にあらわれており、平沢のように今なお近世における産業町の形態を残すところは全国的に見ても少なくなった。ここに平沢の最大の特徴があらわれており、この町は「漆器の町」と呼ぶにふさわしいといえる。

保存構想の基本的な考え方 平沢の町並みは、近世の町並みに、近代以降、伝統的建造物の特性を維持しながら少しずつ形の違う建物が挿入されてきた。つまり、奈良井のように単一様式の建物が軒を連ねるものとは異なり、多様な建築様式の建物によって構成されているのである。そしてそれは、長い期間を経ることで徐々に形成されてきた結果である。したがって、奈良井に見られるような町並みを単一様式で統一感のある姿に整えていくという修景手法は、平沢においては適当ではない。むしろ、多様な建物で構成された町並みを評価し、幅広い時代にわたる建物が織りなす集合体として、保存・整備をしていく必要があるだろう。

平沢は近世の地割を継承し、敷地の利用形態も近世から変わることなく維持されてきた。この敷地の利用形態は、漆器産業の町・平沢独自のものである。したがって、地割と敷地の利用形態も保存していくべきであろう。同様に、敷地奥の土蔵は漆器産業の根幹を支える重要な建物で、平沢においては主屋以上に必要とされてき

た。つまり、漆器産業の町としては欠かすことができない建造物であるから、これも保存されるべきである。

よって、平沢の伝統的建造物群が維持してきた、地割や敷地の利用形態といった町並みを構成する要素とその原理について基本的な骨格を顕在化し、これを継承していくことを基本理念とした保存・整備が今後望まれる。繰り返す言うが、街路に面する建物だけではなく、漆器産業の町としての都市構造を伝統的建造物群の保存・整備によって次世代に受け継いでいかなければならないのである。

また、町の活性化を図るためには、町の特徴を生かした活用方法を考える必要がある。すでに、町では漆器の町を印象づけるための様々な取り組みがおこなわれているが、これを集落全体で日常化することも必要であろう。たとえば漆器生産の場である土蔵内部を公開し、普段では見る機会のなくなった漆塗の作業を訪問者に紹介するなど、漆器の町をより印象づけるような活用を、特徴ある集落形態に着目しておこなう必要があるだろう。

まとめ 平沢の特質は、産業町としての都市構造を現在もなお濃密に継承している点に集約される。その平沢を伝統的建造物群保存地区として保存・整備していこうとすれば、まずもって産業町としての都市構造を継承していかなければならない。そのためには街路に面する建物のみを保存・修景していくこれまでの手法では不十分となる。つまり、伝統的建造物群によって構成される町並みに主眼を置いて保存するのではなく、伝統的建造物群を面として保存することで、町の歴史、伝統を継承していこうとする町づくりが必要となる。これは、伝建制度の本来のあるべき姿ではないだろうか。町並み（ファサード）という表層部だけにとどまらず、奥行をもつ面的な保存を図ることにより、地域の伝統は継承されと考える。伝統的建造物群保存地区制度創設から30年、今まさにその運用方法について見直す時期にきていることを平沢の調査は考えさせた。 (西山和宏・窪寺 茂)